1　陶湘藏書購入始末

前言

京都大學人文科學研究所の前身である東方文化學院京都研究所では、その創設期に民國の著名な藏書家であった陶湘から計五百九十一種二萬七千八百六十三册[1]の叢書を一括購入した。明治以來、中國から様々な經路を通じて、少なからざる古籍が日本にもたらされている。中でも三菱の岩崎彌之助による陸心源皕宋樓藏書の購得は、宋元の古槧を數多く含むため、文物流出として當時一大センセーションを卷き起こした。陶湘所藏叢書の一括購入は、いわゆる善本の範疇に屬するものではないため、これまでさして注目されてこなかったが、また別の意味で重要な出來事であったといえる。その内容は「あらゆる叢書、彙刻、全集等を網羅し、宛然『彙刻書目』を現物にて示したるものの如く」であり、また「書物の吟味は膏肓に入り、何れも精刻原印に係り、且つ一葉の落頁もなく整備され」てあった[2]。草創間もない研究所に必要な書物を如何にして收集するかという一大懸案がこれによって一擧に解決し、圓滑に研究活動を進める上で大きな利便を提供したことは言うまでもないが、今日ではこれらの書物はすでに相當な稀覯書となっていることも指摘せねばならない。

この册子は、陶湘藏書購得の事實につき、現存する關連資料を公刊するとともに、その資料に基づき簡單に購入の經緯を書きとめておこうとするものである。資料は大きく分けて二種。一は、北京に在って陶湘藏書の購入に奔走した倉石武四郎（1897-1975）が、京都の研究所で圖書受入の責任を負っていた松浦嘉三郎（1896-1945）に宛てた書簡十通ほかの資料一括で、現在人文科學研究所に保管されている。この資料一括は裏に「在天津日本総領事館」と印刷された公用茶封筒に入れられ、封筒の表には「倉石君來函／昭和四年／陶氏藏書購得關係／書類／昭和九年九月 司書所管」と墨書されている。これは松浦がこの年、研究所を離れて滿州國に赴任するに當たり、整理保存しておいたものと思われる。現在保存されている倉石書簡は十通だが、一、二缺落している可能性があるのと、一方の松浦が倉石に宛てた書簡を眼にし得ないことは殘念であるが、これだけでも陶湘藏書

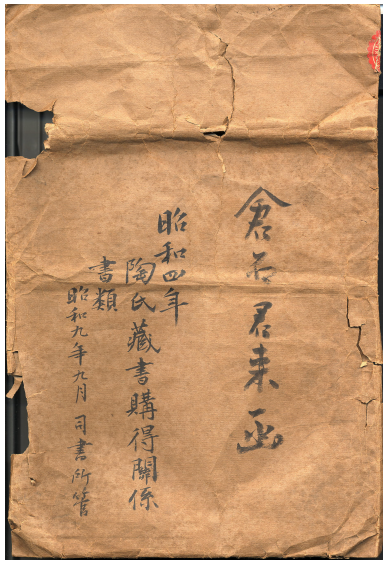

圖 1: 封筒の表書き

[1]册數については、後掲の各關係資料で一致を見ない。ここでは到着後の再點檢を經た信頼できる資料として、3-5 外務省文化事業部寄贈書册目（昭和五年三月四日外務省に提出）の數字による。

[2]倉石書簡（三）の表現。

購得の經緯について恰好の材料を提供してくれる。とりわけ公文書では見ることの出來ない、裏面の事情と倉石の本音が吐露されているのが貴重である。倉石の書簡の文體はいわゆる候文で、しかも現代中國語の語彙をそのままに用いた部分が多く、現代の日本人には少し讀みにくいかも知れない。封筒中にはまた北平の古書肆來熏閣陳氏が松浦に宛てた一通と、關連する電報が三通封入されているが、これも參考のために附録として掲載した。また今ひとつの資料は外務省外交史料館に保存される外務省記録のうち、そのＨ門「東方文化事業關連」ファイルで、その中に陶湘藏書購入に關する文書が「陶湘藏書購入に關する件」の標題で一括されているものがそれにあたる。後者は幸いに外交資料館の許可を頂き、倉石書簡とともに本册子に翻刻と圖版の掲載が可能となった[3]。

一、陶湘藏書に關する報知

義和團の賠償金による文化事業の一つとして計畫された北京人文科學研究所の運營が必ずしも順調ではなかったため、日本國内に研究所を設立することとなり、昭和三年（1928）十月東方文化學院の創設が決定され、翌昭和四年四月には東京と京都にそれぞれ研究所が設置された。後者の東方文化學院京都研究所は、昭和十三年度からは東方文化研究所と改稱し、次いで第二次大戰後の昭和二十四年、京都大學附屬の人文科學研究所と合併して今日に至っている。いま取り上げようとするのはその創立直後の話である。中國文化の研究を使命とする研究所にとって、先ず研究資料として圖書の整備は喫緊の課題であった。そのためには著名な學者、藏書家の舊藏書を一括購入するのが手っ取り早いとして、昭和四年の春頃に葉德輝（1864-1927）の觀古堂藏書及び康有爲（1858-1927）の萬木草堂藏書の購入が檢討されたが、幾つかの問題があり沙汰やみとなった[4]。また同年の五月には在北平

[3]もっともこれらの文書はすでに國立公文書館アジア歴史資料センターのデータベースですべて閲覽が可能である。また倉石書簡の公刊については、池田温教授を通じて、倉石家から許諾を頂戴した。ここに謹んで感謝申し上げます。

[4]後掲「2-2 關係文書」中の（一）狩野直喜書信を參照。また康有爲藏書購得に關する文書は外務省外交史料館東方文化事業關連ファイルの中に「康有爲ノ藏書ノ件」として一括保存されている。『岡部長景日記』（1993 年、東京、柏書房刊）の昭和四年四月二十五日の條に、「三時半外務省に行き、坪上部長、三枝、伊集院、田村君等と先づ研究所補助に關する申請書及補助指令書案につき協議し、…（中略）…次に楊（ママ）德輝及康有爲の遺書購入の件に移り、何れも助成費を交付して購入することとし、其他一、二の件を打合せて五時退去。」とあり、外務省側はすでに購入助成金の支出を内諾しており、問題は經費ではなく、藏書の内容にあったことが窺われる。ちなみに岡部長景（1884-1970）はこの直前まで外務省文化事業部長の職にあった人物で、東方文化學院設立に重要なはたらきをした。舊岸和田藩主岡部長職の嫡男で子爵、貴族院議員、東條内閣で文部大臣をつとめた。

領事館の瀬川淺之進から海源閣藏書出售に關する報告も外務省文化事業部にもたらされて、文化事業部ではそれを東京、京都の各研究所の責任者である服部宇之吉と狩野直喜にそれぞれ傳達しているが[5]、これも實現しなかった。

ところで京都研究所の主任であった狩野直喜は、諸方に情報を求める傍ら、當時北平に留學中であった京都帝大助教授の倉石武四郎にも適當な藏書の物色を依頼していた[6]。倉石は京都研究所の藏書構築計畫に對して二つの案を提示していたようである。書簡の書きぶりから判斷すると、第一案はある藏書家の藏書を丸ごと購入するというもので、第二案は北京の古書肆と連攜しつつ必要な書物を逐一購入するというものであったらしい。倉石は結局、第一、第二案の併用が上策であると判斷し、そのように提案しつつ、第一案の目標を色々と探った。主として相談に與ったのは徐森玉（1881-1971）で、徐は當時北平に置かれた東方文化事業總委員會の圖書部主任であった。

昭和四年（1929）六月十三日、徐森玉が倉石を訪問し、天津の陶湘の所藏品の目録を示した[7]。陶湘は藏書家であるだけでなく、非常な愛書家で、その藏書は裝本にすこぶる意を用い、「木箱まで吟味して造り、之に文字を刻したる入念ぶり」であったため、その價は相當高くなることが豫想された。しかし倉石は「百萬の疏品を備ふるよりも、この一精藏を基礎」とするのが最上であると判斷し、その購入を外務省に働きかけるよう松浦に促した。さらに甲乙兩案を併用することで、清朝文集や經解單行本が補入し得る可能性を說き、その乙案の費用に一萬圓ほど欲しいというのが倉石の考えであったが、その後の成り行きを見ると、これはそのままの形では實現しなかったようだ。注目すべきは倉石が「若しこれ丈の叢刻を備へて其の分類目録を完成されんか、叢刻に惱める學界にとりて一大福音と存候」と言っていることで、後に研究所がその藏書目録を編纂する際に採用した方向性を既に打ち出している點であろう。その分類目録は戰爭最中の昭和十八年（1943）、『東方文化研究所漢籍分類目録 附 書名人名通檢』として出版され、倉石の豫想通り學界に大きな利便を與えることとなった[8]。

---

[5]東方文化事業關連ファイルの内「昭和四年五月 海源閣藏書出售ニ關シ報告ノ件」を參照。

[6]倉石書簡（一）に「研究所にて一家の藏書を購置せらるるの案成立致し候由、御同慶の至に御座候。よって早速徐森玉先生を訪うて、その幇忙を敦請致し候」とあり、これは松浦嘉三郎の五月五日付け書簡に對する返事であるから、松浦はこの時點で狩野直喜の意を承けて、倉石に依頼したものと思われる。

[7]この待賈書目は倉石書簡（三）に附して京都に送られ、すぐ狩野直喜から服部宇之吉の許へ寫しが送附され、更には外務省文化事業部にも屆いた筈であるが、傳わっていない。

[8]増補新版は『京都大學人文科学研究所漢籍分類目録 附 書名人名通檢』として、1963-65 年に刊行された。『東京大學東洋文化研究所漢籍分類目録』は、ほぼ同じ編集原則に基づいて作られている。人文科学研究所の漢籍目録にはまた『京都大學人文科學研究所漢籍目録』（1979-80）があるが、これは叢書の子目を分出した分類目録體ではなく、物理單位としての書物を四部分類順に竝べたも

倉石はまたこの蔵書の購入には、金額もさることながら時間も大きく影響することを指摘し、「相成る可くは研究所より東京に人を派し、膝詰め談判にかけ至急御決定あり度」と書き送り、もし購入決定の連絡を受けた場合には、「小生直に下津の上、詳細に調査を加へて責任を明に致す心算に有之候」と決心の程を披歴している。やがて購入の仲介をした徐森玉から價格三萬圓の連絡がもたらされ、それは六月十九日、電報により京都の松浦嘉三郎に通知された[9]。

倉石からの連絡を受けた京都研究所では、所長狩野直喜が倉石の提案を容れ、陶湘藏書の購入に向けて動き出すことになる。狩野は先ず七月一日に文化事業部長の坪上貞二に宛てて書簡を認め、倉石の紹介になる陶湘の藏書五百九十五種を文化事業部で購入して貰いたい旨の依頼を行った。狩野はまた「右書籍ヲ當局ニテ御購入相成候節ハ、之レヲ二分スルハ面白カラス、此次ノモノハ京都研究所へ御下附相成度、此事ハ豫メ服部東京研究所長ノ諒解ヲ受置候間、右御含被下度相願候」と付け加えることを忘れていない[10]。ちなみに東京研究所のほうでは以前から浙江青田の徐則恂（1874-1930）の東海藏書樓藏書を購入する話が進んでおり、昭和四年十月にこれを三萬四千弗で購入した[11]。

京都の研究所では、狩野所長が坪内東方文化事業部長に手紙を書いた七月一日、同時に北平の倉石に對して打電し、購入の方向である旨を傳え、松浦も詳しく書信でその後の展開を說明したらしい。そこには書籍購入のために狩野所長が東京の文化事業部まで足を運ぶであろうことも書かれてあったらしい。そこで倉石は急ぎ七月十一日に徐森玉を訪問した。その頃、巷間には陶湘の藏書は目録と内容とが一致しないなどという風說があったりしたため、それを問いただすためである。徐森玉は陶湘の實弟である陶洙（字は心如）をその場に呼び寄せ、陶洙から風說が根據のないこと、むしろ目録以外にも書物があるということを確認し、購入が決定次第、天津に調査に赴くことの約束を取り付けた。狩野は豫定通り東京に行き、直接に文化事業部に對して陶氏藏書の購入方を依頼した。當局が正式にそれを認可したのは七月十二日である。狩野は早速、東京から京都の松浦に對して電報で「書籍、買ふことに決まった」と知らせている[12]。同じ七月十二日には、外務省か

のである。したがって子目は各叢書の項目下に書き出してある。

[9] 2-1 倉石書簡（附二）の電報。

[10] 2-2 關係文書（一）。

[11] 購入契約締結の日付は昭和 4 年（民國 18 年）10 月 17 日、書物が實際に東京研究所に到着したのは 12 月である。その關連資料は外務省外交史料館東方文化事業ファイルの中に「東海藏書樓書籍購入」の標題で保存されている。また最新の研究として巴兆祥「日本劫購徐則恂東海樓藏書始末考」『文獻』2008 年第 1 期、131-142 頁が詳しい。

[12] 倉石書簡（附三）。

ら幣原外務大臣名で天津の岡本総領事に對して電報が送られている[13]。それは、やがて倉石が陶湘藏書購入の下調べのため天津に向かうこと、その調査終了後には結果を電報で報告せよという内容であった[14]。

二、天津における調査

倉石は七月二十六日早曉にようやく陶洙の同道で天津に向けて出發、同日の午後に天津に着いた。當時京大の大學院學生で、北平に留學中であった水野清一が助手として同行した。その直前、陶湘は天津に居らず、二十九日に天津に歸るという豫定を聞きつけての、慌ただしい旅程であった。倉石の心つもりでは、二十七、二十八日を調査に充て、二十九日徐森玉が天津に來るのを待って正式調印という手筈であった。外務省からも二十六日發で天津総領事に宛て電報が發信され、倉石の調査に協力すべきこと、調査の結果を、圖書の總册數、帙數、印刷製本の良否、價格の點などにつき、倉石から聽取のうえ、その大要を電報で、詳細を郵便で報告するようにという指令が爲されていた[15]。

ところが天津特別一區十號路の陶氏自宅に於ける調査は、案に反してすこぶる難航した。それは陶湘の示した目録が不備であったこと、個々の書物の配置に原則がなく、また天津に置いていない書物もあったりして、圓滑な調査を妨げたこと以外に、陶湘自身のぬらりくらりとした態度に翻弄されたためである。倉石は相當に手古摺ったらしく、松浦宛の書簡で、かなり強い調子で陶湘を非難し、「殊に目録中重要の書、たとへば秘册彙函、八旗通志、原刻汪氏遺書の如き、誤りて書き入れたりと稱し、又はかかるものなしとさへ公言して極力抹消を計り、殆ど讀書人の態度に非ざるものあり」と書いている[16]。購入には正確な目録作製が不可缺であり、倉石が天津に來た目的は、書物を一々實檢した上で、その目録を作製することだった筈で、個々の書目について、あれは駄目これは駄目ということでは、一向に仕事が捗らなかったことが想像される。そんなわけで再び徐森玉に天津までの出馬を要請し、調停を圖るしかなかった。結果、當初提示された目録から十九種を除外、それ以外のすべてを購入することにし、除外した分の代償として、「瓦礫を捨てて珠玉に替ふるの目的の下に」、別の十三種を要求したところ、幸い陶氏

[13]關係文書（二）。電信案が起案されたのは十一日だが、關係文書（三）によると實際に電送されたのは翌十二日である。
[14]2-2 關係文書（二）。
[15]2-2 關係文書（三）。
[16]倉石書簡（七）。

の承諾を得た[17]。その經緯は倉石書簡（七）及び倉石の外務省宛報告書[18]に詳しいが、驅け引きの活寫については斷然前者が光彩を放っている。

かくして二、三日で終了する豫定であった天津の點檢調査は、大幅に延長を餘儀なくされ、八月三日にようやく完了した。二日から開始した箱詰め作業は、水野清一が助手として熱心に働き、また三井洋行社員の援助もあり、五日間かけて六日に完了した。箱詰めされた數は總計百八十八個に達した[19]。八月七日、これらを陶氏の自宅車庫から搬出し、表面上イギリス租界の金城銀行に對する抵當の形式とし、隣接する通成貨棧に運び入れた。そこから先は三井と領事館に任せるのみである。

それ以前の八月一日、岡本総領事は先の外務省からの指令に基づき、倉石の調査結果を蹈まえて、「圖書の總册數二萬四千六百十四册アリ、帙數三千八百三十四帙ニシテ、印刷製本ハ孰レモ可良ナリ。右ノ外現在北平ニアルモノ約三百五十册五十帙モ加ハル筈ニテ、價格三萬一千弗ニ折合ヒタリ」と外務省宛に電報で報告し、併せて代金の送附方を依頼した[20]。それに對し外務省では、八月三日、「御申越ノ書物代金三萬一千弗至急電送スベシ」と返電した[21]。書籍代金送附の報に接した倉石は、代金が到着した曉には[22]、そのうち三萬元を陶氏に手渡し、それに對して三萬一千元の領收書を受け取るかわりに、倉石自身が陶氏に一千元の領收書を交付し、その一千元を徐森玉に謝禮として贈るべく手配を行った。この邊り些か微妙であるが、事實そのように行われたに違いない。八月七日、倉石は松浦宛にそのように報告している。倉石はこの日の夜、關係者を招いて會食しその勞を犒った。かくして倉石の天津における調査は終了した。

三、書物の搬送と到着前後

百八十八個の木箱に分裝された書物は、八月二十日發の近海郵船南嶺丸で天津から積み出された[23]。北平公使館から本省に宛てた公用文書として、通關手續きは

[17]除外分と代償分の書目について、書簡（七）と外務省宛報告（關係文書十七）とでは若干の出入りがあるが、いまその數字は後者に據った。

[18]2-2 關係文書（十七）。

[19]詳しくはビール箱が百八十七個、それと同じ大きさの木箱一個。

[20]2-2 關係文書（四）。この電報の内容は、文化事業部から京都の狩野直喜にも報告された。關係文書（五）。

[21]2-2 關係文書（六）。ただし

[22]三萬一千弗の代金は八月十日までには到着し、取引は終了した。しかしそれ以外に、荷造り料や倉敷料、保険料などの經費が必要で、天津領事館ではその金額一千弗を再度電送するよう本省に對して要請している。關係文書（七）。

[23]倉石書簡（附四）、2-2 關係文書（八～十）

無檢査であった[24]。上に言及した七月二十六日付の外務省から天津総領事に宛てた指令には、「支那現下ノ事情ニ鑑ミ」、この購入の件は内密に取り扱うべき事、購入決定の際には表面上、天津總領事館が購入したことにして本省に送るよう指示されていた。この頃中國國内では古籍の日本流出に對して非常に神經質になっており、こういった配慮が必要であった。この二年後に滿州事變（柳條湖事件、また九一八事變）が勃發すると、北平市政府は古物保存委員會の勸告をうけて、公安局及び社會局を通じて北平の古書肆に對し調査を實施し、日本への輸出を行うものがあれば古物保存法に基づき嚴重處罰することを決定した。それに對して琉璃廠や隆福寺の古書肆のほうでも相應の對策を講じたため、この輸出禁止措置は畫餅に歸したと傳えられている[25]。ただ大量の古籍善本の國外流出に對しては、以前から中國知識人が危機感を抱いていたことは事實であり、陶氏藏書購入に際しても愼重な扱いが不可缺とされたのである。

南嶺丸は二十四日神戸に入港したが、まだ日本側の通關手續が必要であった。外務省では吉田茂外務次官名で河田烈大藏次官に對して公信を送り、神戸税關に對して特に簡易通關にするよう通知してほしい旨の依頼がなされた[26]。また荷物の受取には船荷證券が必要であったが、二十一日付で天津から送附された證券及び海上保險證は月末になってようやく外務省に屆き、八月三十日文化事業部から狩野の許に轉送された[27]。その後すぐに手續きが行われ、すべての書物は無事京都に運ばれたと想像されるが、その邊りの關連文書は缺けていて、實際に何時京都に到着したかは不明である。いずれにせよ京都では大量の書物を目の前にして、その點檢に相當な時間を費やしたことと思われる。その仕事は當然主として松浦嘉三郎が擔當したはずである[28]。

十月になって北京の古書肆來熏閣の陳杭（濟川）が來日した。來熏閣の主人陳杭は琉璃廠の古書肆の中でももっとも親日的な人物として、倉石をはじめ日本の留學生や學者たちの多くがこの書店から古書を購入している。彼は十月五日出航の南嶺丸に乘船、八日に福岡に着いた。彼は「做套工人」すなわち書帙を作製す

[24] 2-2 關係文書（八）。

[25] 外務省外交史料館所藏外務省記録「東方文化事業關連」ファイルのうち「古籍善本ヲ本邦ニ寄贈」と題する一件に收録する「古籍善本ヲ日本方面ニ禁售ニ關シ報告ノ件」と題する文書（東方文化事業總委員會委員瀨川淺之進が、昭和六年十一月二十三日付けで坪上文化事業部長に提出したもの）を參照。

[26] 2-2 關係文書（九）。

[27] 2-2 關係文書（十三）。

[28] 3-4 陶氏叢書點檢目（擬題）は、恐らくその過程で作製されたものであろう。

る職人を連れて來ており[29]、それを福岡で井上なる人物に託し京都へ送り屆けた。倉石が手配したものであることは明かで、研究所が購入した書物の帙を新たに調製するためであった。圖書館の書庫に排架するには、どうしても帙に納めておく必要があり、その爲に來熏閣に職人の斡旋を依頼したものであろう。この事實は外交史料館の文書には見えず、もちろん狩野の承認を得た上でのことであったに違いないが、倉石と松浦との連攜プレーであったと推測される。

さて七月末から八月初にかけての天津調査時點で、書物が天津にはなく、北平に置いてあるとされた部分はその後どうなったであろうか。この部分は全體の金額中に含まれていたため、後はそれらを陶氏から受け取り、日本に送れば好いだけであり、その手續きはすべて倉石の責任において處理することになっていた。しかしそれがようやく片付き、發送することが出來る狀態になったのは十一月二十八日のことであった。内容は通志堂經解六十套、四百八十本をはじめとする十九種八百五十三册である[30]。それをタバコの箱二個、その三分の二の大きさの箱一つに詰めて、前回同樣に公用郵便物として送る算段であった。ところが些か思わぬことが起きた。というのは少し前に北京に來ていた濱田耕作（京大教授）が大學のために購入した書籍一箱を、濱田の學生である水野清一が預かっていたが、水野はその送附證明をどうして行えば好いかに困惑して、倉石に相談を持ちかけてきたのである。水野は先の第一次分の發送を獻身的に手傳ってくれた經緯もあり、水野にとって直接の恩師である濱田の依頼であってみれば、斷りきれない事情があることを察した倉石は、仕方なく濱田のこの一箱を陶氏書籍第二次分とともに、公使館から證明を取って一緒に送ることにした。公使館には内證である。したがって關係文書類ではすべて全四箱となっているが、陶湘藏書分は實際には三箱であった。倉石は十一月二十八日付の松浦宛書簡中で、松浦なり濱田なりから、狩野所長に認可を求めるように頼んでいる[31]。倉石自身も「權宜の處置」と言っているように、今となっては時效であるが、いささかイレギュラーな遣り方である。

ともあれすべての手續きが終了し、北京から天津に運ばれた第二次分の「四箱」は、十二月二十六日に北京を出て、三十一日天津出帆の近海郵船景山丸に積み込まれた[32]。しかし正月の休みもあったせいか、一向に到着の音沙汰がない。北京の倉石も責任上相當氣になったとみえ、昭和五年一月二十四日付の松浦宛書簡で、「陶

[29]工人の數は二人であった。吉川幸次郎「人文科學研究所東方部の漢籍と私」『人文』新館落成記念號（昭和 49 年 5 月）、後『吉川幸次郎全集』第二十三卷に收録、その 640 頁。

[30]數字は「外務省文化事業部寄贈書册目」による。

[31]倉石書簡（九）。

[32]2-2 關係文書（十八）の一月六日發信「堀内謙介臨時代理公使書信」。この機密第四號公信は一月二十四日に外務省に着いた。

書第二批未だ到着致さず候や、懸念の至り」と書き送り[33]、丁度同じ二十四日に、しびれを切らした松浦のほうでも文化事業部の岩邨書記官に宛て、發送以來一ヶ月になるにも關わらず到着しないのはどうしてかと照會している[34]。これも同じ二十四日、文化事業部長の坪上貞二は狩野直喜に宛てて、横濱正金銀行から北平神戸間の運送費の請求があったのでそれを支拂ったこと、同時に船荷證券を轉送したことを報知している。坪上はまたこの日に到着した堀内謙介臨時代理公使の機密第四號公信の寫しも添附した[35]。松浦の照會狀を文化事業部が受け取ったのは二十七日で、ちょうど行き違いになった形である。そうこうして最終的に第二次分の書籍が京都の研究所に到着したのは何と二月二十二日のことであった。狩野はこの日に書籍安着の報告旁々、神戸京都間の運賃十八圓三十一錢を立替て支拂ったことを、文化事業部長の坪上に書き送っている[36]。

かくして第一次、第二次分の書籍全部の整理が終了すると、狩野は「外務省文化事業部寄贈書册目」という目録を作成、昭和五年三月四日に文化事業部に提出した[37]。この目録が昭和四年（1929）に東方文化學院京都研究所が一括購入した陶湘舊藏書の全目ということになる。幸いに外交史料館のファイル中に保存されているので、本册子ではこれを資料3-5として影印することにした。この目録、内題には「武進陶氏藏彙刻部書目」とあり、以下のように分類して書名を列擧し、それぞれの本數を記入してある。

一 經類　三十八種　二千一百七十六本
二 史類　二十七種　三千二百四十七本
三 子類　二十七種　一千七百四十二本
四 集類　三十一種　一千四百八十六本
五 叢刊類　一百六十九種　八千八百九十九本
六 影仿類　十一種　三百四本
七 輯佚類　十種　二百九十六本
八 郡邑類　三十五種　二千二十一本
九 一姓所箸〔類〕　三十八種　七百二十七本
十 一人所箸類　一百五十六種　三千七百三十九本
附 地志類　三十種　二千三百六十一本

[33]倉石書簡（十）。
[34]2-2 關係文書（二十一）。
[35]2-2 關係文書（二十）
[36]2-2 關係文書（二十二）。
[37]2-2 關係文書（二十四）。

さらにこれに第二次送附分を書き加え「右十九種、後寄八百五十三本」として、最後に「總計五百九十一種、二万七千八百六十三本」と結んでいる。第二次分を末尾に付け加える形になっている所を見ると、この目録は當初、第一次分の到着點檢が濟んでまもなく作製されたものであることが分かる。その端厳な肉太の筆跡は、おそらく狩野自らの手になるものである。

これで一件落着、すべてが完了したと思ったところ、運賃の手續きについてちょっとした手違いがあった。本質的なことではないが、資料に加えた手前、簡單に觸れておきたい。

實際には文化事業部のほうで既に支拂濟であった北平神戸間の書籍輸送運賃は、會計處理上、形式的に研究所が支拂うかたちになっていたと見え、研究所から文化事業部に對して請求書を提出することになっていたらしい。十二月二十四日の狩野宛の公信で[38]、坪上はわざわざ請求の際に正金銀行の「メモ」を添附するように要求していた。しかし松浦が狩野から預かっていた坪上のこの書信を遺失したため、翌年三月七日付の文化事業部公信[39]の「追て書」にある正金銀行「メモ」の意味が理解できなかった。松浦はその件に關して坪上に照會[40]、ようやく事の次第がわかり、改めて京都研究所から請求書が提出された。ただしその日付は八月二十六日である[41]。

附：松浦嘉三郎について

上に見たとおり、陶湘所藏の叢書を購入するに際し、一貫してその衝に當たり、もっとも功勞のあったのは倉石武四郎であることは自明である。倉石書簡には公的文書には現れない事柄が細かに綴られているほか、當時の北京の學術界や古典籍市場の様子、日本の學者や留學生たちの動靜についての記述が垣間みられ、學術史の材料として興味深いものがある。この時期の倉石についてはすでに『倉石武四郎中國留學記』[42]があるが、ここに公刊する松浦宛書簡はそれを補うべき資料でもある。倉石はその後、京都大學教授となり、昭和十五年（1940）以後の一時期は、東京、京都兩大學の教授を兼ね、戰後は東京大學の專任となった。多くの俊秀がその門下から育ち、日本の中國學史において誰一人知らぬ者のない大きな存在である。一方、京都にあって書物の受入を擔當した松浦嘉三郎の名を知る人は、

[38] 2-2 關係文書（二十）。
[39] 2-2 關係文書（二十三）。
[40] 2-2 關係文書（二十五）。
[41] 2-2 關係文書（二十七）。
[42] 榮新江・朱玉麒輯注、中華書局 2002 年刊。

現在では極めて稀である。われわれは倉石書簡ほかの關係資料を保存してくれたことに感謝しつつ、この場を借りて松浦嘉三郎という人物について些か書きとめておきたいと思う。

松浦嘉三郎は倉石よりも一歳年長で、明治二十九年（1896）年八月、大阪東區平野町に生まれた。大正三年（1914）三月に大阪府立天王寺中學校を卒業し、同年八月上海の東亞同文書院に入學した。その第十四期生で、愛媛縣の選拔であった。大阪出身の松浦が何故愛媛選拔なのかは、同文書院の公費生が全國各府縣からの選拔の形式をとっていたことと關係すると思われるが、詳細は不明である。翌年の八月夏休みで歸鄕した折、京都大學の夏期講習會において内藤湖南の「清朝史通論」を六日間聽講した。その折、當時泉殿町にあった湖南の寓居を訪問し、はじめてその謦咳に接した。松浦が内藤に私淑するに至る最初の出會である。松浦は大正六年（1917）の六月に同文書院を卒業しているが、その年の四月すでに京都帝國大學文科大學史學科に選科生として入學している。同專攻の丹羽正義の回想によれば、松浦は「明るい、悠々たる、そして親切な人柄はたのもしいものでした」と評されている[43]。もとより湖南について中國史の研究に邁進する決意であり、大正九年（1920）三月には、史學科支那史學專攻を卒業している。この支那史學というのは湖南のために設けられた專攻だといわれ、卒業生の數はごく僅かである。京大の卒業生名簿によると、松浦以外には、丹羽正義（大正 6 年卒）、神田喜一郎（大正 10 年卒）、内藤雋輔（大正 10 年卒）、小竹文夫（昭和 3 年卒）、藤田至善（昭和 6 年卒）の名が見えるに過ぎない。ちなみに少し後輩にあたる小竹文夫は、松浦と同じく同文書院の出身で、京大を卒業してから母校の教壇に立った。小竹は昭和四年五月頃、文化事業部で康有爲の藏書購入の話が持ち上がった時には、狩野直喜の推薦で藏書の檢分に當たっており[44]、本稿の主題とも若干の關係を有する人物である。

松浦は大學卒業と同時に京都東山中學の教諭を勤めたが、大正十一年（1922）に北京に赴き漢字紙「順天時報」社の記者となった。同年九月に同じく「順天時報」の記者となった橋川時雄の回想によれば、松浦の入社は橋川より少し前であったというから[45]、おそらく松浦の入社は春から夏にかけての頃と思われる。東山中學

[43]丹羽正義「内藤先生」『内藤湖南全集』月報四（第十一卷附録）昭和 44 年 11 月刊。

[44]外務省外交史料館東方文化事業ファイル「康有爲ノ藏書ノ件」に收録される狩野の書信に「上海同文書院教授ニ小竹文夫ト申スモノアリ。京都文學部之卒業生ニ有之候。若之如きものに御依頼有之候ハバ都合よろしからむと存候」とある。上で見たとおり、康有爲の藏書は購入に至らなかったが、おそらくこの時の縁であろう、数ヶ月後、東京研究所が徐則の東海藏書樓藏書を購入する運びになったとき、同年八月にやはり依頼されて書物の調査に當たった。小竹の自筆の調査報告が東方文化事業ファイル中の「東海藏書樓書籍購入」に殘されている。

[45]今村與志雄編『橋川時雄の詩文と回想』2006 年、汲古書院刊、130 頁。

を辭したとすれば、三月の學年を終えた直後か、或いはその少し後のことだったに相違ない。松浦はこの新聞社で八年ほどを過ごした。その間、師の湖南とは連絡を絶やさなかったようで、時には湖南の依頼に應じて北京で資料の收集を手傳ったりしたこともあった[46]。

昭和四年（1929）に東方文化學院京都研究所が成立すると、松浦はその研究員となった[47]。三十三歳であった。發令は五月一日付で、松浦は順天時報社を五月四日に退社し[48]、京都に歸ってきた。おそらく湖南の推輓になるものであろう。研究員就任後、すぐに陶湘藏書の購入に當事者として立ち會うこととなったのは上に見たとおりである。この時期の松浦は、大谷大學や龍谷大學で講義を受け持つとともに、『支那學』の編輯も擔當することになり[49]、多忙な、しかし充實した日々を過ごしたように見える。昭和五年（1930）四月には、師の内藤湖南及び地理學の小川琢治教授の依頼を受け、楊守敬の『水經注疏』稿本を求めて上海から武昌に入り、楊守敬舊宅で孜孜として原稿に筆削を加えていた弟子の熊會貞に面會している[50]。同じ昭和五年の秋、一乘寺の詩仙堂で樂群社の雅會が催された時、師に從ってその末席に連なったこと[51]、昭和七年（1932）十月、師とともに天理圖書館の開館二周年記念講演會で講演を行ったことなどは、松浦の記憶に長く留まったことと思われる。しかしその幸福な時間も永遠ではなかった。昭和九年（1934）六月二十六日、師の内藤湖南が惜しまれつつ逝去したからである。松浦は同年の九月三十日、五年間の研究の區切として「漢書百官公卿表の一研究」を提出して東方文化學院京都研究所を退職した[52]。同じく創立時期に研究員となった人々が、長く

[46]董康（1867-1947）が所藏する敦煌寫本の寫眞を複製してくれるように頼まれ、それに應じたときの湖南宛書翰（昭和二年三月）が關西大學に殘されている。拙文「内藤湖南の敦煌學」『東アジア文化交渉研究』別册 3（2008）、25-26 頁。

[47]給與は年額一五六〇圓で、一ヶ月早く着任した梅原末治、同じく五月一日付着任の能田忠亮、塚本善隆等の一四四〇圓よりもやや高いのは、年齡と職歷によるものであろう。ちなみに主任の狩野直喜の給與は年額三千圓であった。東方文化事業ファイル「東方文化學院關係雜件／經費關係第一巻、昭和四年度助成金」。

[48]上掲『橋川時雄の詩文と回想』130 頁に引用される順天時報社「社員異動録」による。

[49]同誌の奥付の頁には毎號「支那學社簡章」が掲載されているが、その末尾に董事の本田成之、小島祐馬、青木正兒と竝んで、昭和四年十月刊行の第五巻第三號以降、同九年七月刊行の第七巻第二號まで、編纂として松浦嘉三郎の名が見える。ちなみに松浦以前の編纂は神田喜一郎、吉川幸次郎、倉石武四郎の三名であった。三名で擔當していた雜誌の編輯を一人でやるには相當な時間が割かれたに違いないが、松浦はこの時期『支那學』各號に後に掲げるような新刊紹介を執筆するほか、「學界雜報」にも多數の記事を書いているのは、編集者としての職務上致し方なかったものと思われる。

[50]日比野丈夫「楊守敬の『水經注』研究」『中國歷史地理研究』（京都: 同朋舍、1977 年）387 頁。

[51]拙文「李滂と白堅（補遺）」『敦煌寫本研究年報』第二號（2008 年 3 月）、186-187 頁。

[52]退職の日付は昭和十年十一月刊行の『東方文化研究所要覽』「舊役員及職員」欄による。ただし東方文化學院の理事會において辭職が承認され、それが文化事業部に報告されたのは十月二十五

研究所に留まり、その學問を大成させたのと對比すると、松浦の早期退職はかなり異例なことのように思える。

松浦は師の沒後まもなく、滿州國の大同學院教授に赴任すべく日本を後にすることになる。雜誌『支那學』第七卷第六號の「學界雜報」には「松浦嘉三郎氏滿州國赴任」という見出しを掲げ次ぎのような記事を載せている：「東方文化學院京都研究所研究員であり、又本誌編纂擔當者であった同氏は滿州國文教部囑託と爲り九年十月十二日新京に赴任されたが近く同國大同學院教授に轉任せらるる筈。」湖南の死と松浦の辭職に何らかの關係があるか否かは不明である。或いは滿州への赴任は湖南の生前に、その推薦によってすでに決定していた可能性もあるが、それもまた今となっては分からない。ただ湖南が生前に準備し、中國で印刷したいと考えていた漢文集の原稿を、自分が印刷を引き受けると言って、中國に赴任する時に攜帶していったと言われるから[53]、最後まで師恩に報いようとしたことが窺われる。いずれにせよ昭和九年十一月二十三日に湖南の追悼會が催された時、松浦はすでに大陸の土を蹈んでおり、これに出席することが出來なかった。

滿州國の首都である新京（長春）に赴任後、暫時、同國文教部囑託となった後、大同學院教授に着任した。大同學院は滿州國における官吏養成機關で、その學生は大學卒業者あるいは行政官經驗者を採用、修学期間中は給與が支給された[54]。松浦はこの學校で中國史を講じ[55]、また昭和十年（1935）夏には第一部の學生十名を連れて日本見學旅行を行い、翌十一年には第二部第四期生十班百名からなる旅行團を引率して各地の工場や施設を見學した記録が殘っている[56]。康德四年（1937）、滿州朝鮮史の大家稻葉君山（1876-1940）が建國大學の教授として新京に赴任、大同學院でも教鞭を執ったので、その逝去に至るまでの三年間は極めて親しく交わった[57]。康德四年（1937）十二月には、建國大學から派遣されて稻葉等と共に北京に

日である。東方文化事業ファイル「昭和九年十月京都松浦研究員ノ辭職外理事會承認」を參照。また東方學報（京都）第六册（昭和十一年二月）374 頁彙報欄の「研究員研究結果報告提出」の記事には「右は十年四月研究期限滿了の處、九年九月退職に付き其一部を提出」とあるから、任期滿了を待たずに退職したのである。

[53]内藤乾吉『内藤湖南全集』第十四卷「あとがき」、昭和 51 年 7 月刊。

[54]大同學院には第一部と第二部の別があった。第一部は本來「日本ノ高等專門ノ教育ヲ受ケタル者ヲ收容」するものであったが、中華民國又は舊政權時代に高等教育を受けた滿州の青年中から優秀な者が選ばれ編入された。一方、第二部は「滿人青年官吏中ヨリ優秀ナル人材ヲ簡拔シ王道建國ノ精神ニ基キ訓育ヲ施シ國策ノ大綱ヲ體セシメ國家建設ニ精進スル有德有爲他ノ模範タルベキ官吏ヲ養成スルヲ以テ目的」としていた。（『康德三年度 大同學院第二部第四期生視察旅行團日程及名簿』に掲げられた「滿州帝國大同學院第二部設置ノ目的」による。）

[55]井村哲郎「岩崎健叟氏ヒアリング記録（I）――大連税關・大同學院・滿州國關税科」『環日本海研究年報』第 6 號（1999）、122-124 頁。

[56]東方文化事業ファイル「滿州國大同學院學生見學ノ件」他。

[57]松浦「稻葉君山博士の追憶」『書香』第 125 號（昭和 15 年）3-4 頁。

出張した。その使命は盧溝橋事件後に日本軍が北京を占領したことを承けて、同地にある文獻古籍を滿州國に讓り受ける可能性があるかどうかを探ることであった。當時、滿州國では建國大學に附屬して國立圖書館の開設を企圖しており、その藏書を充實させるために目を付けたのが、故宮の檔案と外務省管下にある東方文化事業總委員會の圖書とであった。翌年の一月一九日付で提出された復命書が殘っているが[58]。その結論では、「故宮ノ材料ニツキテハ、今暫ク緘黙シテ事態ノ推移ヲ靜觀スベシ」とされたが、「東方文化圖書館ノ方ニツキテハ、外務省ニ極力運動シテ、之レヲ滿州國へ移讓セシムル樣決意ナサシムベシ。而シテソノ可能性アリ」とされている。この結論に基づき、翌年の二月二十三日、建國大學の擔當者と陸軍省軍務課の本間誠少佐が外務省を訪れて、東方文化事業總委員會圖書の滿州國立圖書館への讓渡方を申し入れた。この唐突なプランが軍主導による極めて強引なものであったことは容易に推測されるが、外務省側は當然ながらこれを拒否した[59]。松浦がどれほどこの計畫に積極的に關與したかは分からない。しかし東方文化事業總委員會の圖書の實質的責任者は、奇しくもかつての順天時報社の同僚橋川時雄であった。この件につき、二人が北京でどのように話したかについては徵すべき資料がない。兩人共に複雜な心境だったであろう。

松浦はまた康德六年（1939）七月から奉天の國立中央圖書館舊記整理處長を兼任したが、同八年（1941）三月に解職、ふたたび大同學院專任となった。その間、母校である東亞同文書院大學の同窗會の委託を受けて、書院の現狀及び改善策に就いての調査報告を行っている[60]。かくして松浦は大同學院教授として終戰を迎えることになるが、それ以後の消息は杳として知れない。ソ連軍に殺害されたとも傳えられ、厚生勞働省の「舊ソ連邦及びモンゴル抑留中死亡者名簿」のうち資料未提供者名簿（ソ連から名簿の提供されていない）に松浦嘉三郎の名が見えているが、他の死亡者のほとんどが「推定される死亡場所」として、某州の某收容所或いは某病院とあるのに對して、「ソ連」としか記載されていないのはかなり異常である。將兵でもなく軍屬でもない松浦の身に何が起こったかは知るよしもないが、まさしく「終戰の混亂時に犧牲となった」[61]というしかない[62]。

---

[58]東方文化事業ファイル「昭和位十三年二月總委員會書庫所藏書籍讓方ニ關スル件」に含まれる「康德四年十二月北支出張調査復命書」。

[59]上記東方文化事業ファイル「昭和位十三年二月總委員會書庫所藏書籍讓方ニ關スル件」を參照。

[60]後掲著作目録中の「同文書院の現狀竝に其改善策に関する調査報告書」。

[61]『東亞同文書院大學史』(滬友会、1982 年）には「松浦嘉三郎（愛媛）昭和 10 年秋、王道樂土の新國家建設のため渡滿。大同學院出の鵬翼を伸ばす暇もなく、終戰の混亂時に犧牲となった。」と書かれている（447 頁上欄）。

[62]筆者は、滿蒙資料協會『第三版 滿州紳士録』（昭和 15 年刊、また『滿州人名辭典』として 1989 年日本圖書センターより影印刊行）89 頁の記載などをたよりに、かつて松浦の遺族を搜したこと

松浦嘉三郎著作目録[63]

「船室にて」『風餐雨宿』東亞同文書院大旅行志 14 期、大正 5 年（1916 年)

「下關媾和會議」『中央史壇』第 4 卷第 1 號、大正 11 年（1922 年）

「日支勞働爭議の嚴正批判」『外交時報』第 498 號、大正 14 年（1925 年）

「教室に於ける西村先生」『懐德』第 2 號、碩園先生追悼録（大正 14［1925］年 2 月、懐德堂堂友會)

「斯文之厄運」『文字同盟』第 4 號（1927 年 7 月）

「儀禮の成立に就て」『支那學』第 5 卷第 4 號（1929 年 12 月）

「字の起源に就いて」『桑原博士還暦記念東洋史論叢』（1931 年 1 月）

「支那古代の長子相續制度」『東方學報』第 1 册（1931 年）

「九族考」『支那學』第 6 卷第 2 號（1932 年 4 月）

「喪服源流考」『東方學報』第 3 册（1933 年 3 月）

「兩漢時代の廟制」（開所三週年記念講演會講演要旨）『東方學報』第四册（1933 年 12 月）

「漢書韋玄成傳を讀む」『支那學』第 7 卷第 2 號（1934 年 2 月）

「志を抱いて逝かせらる」『支那學』第 7 卷第 3 號附載「内藤先生追悼録」（1934 年 7 月）

「漢書百官公卿表の一研究」東方文化學院京都研究所研究報告（1934 年、未見）

「漢人種の政治的能力」『大亞細亞』昭和 11 年（1936）7 月號

「熊固之翁の追憶」『東方學報』第 7 册（1936 年 12 月）

「稲葉君山博士の追憶」『書香』第 125 號（1940）

「同文書院の現狀竝に其改善策に関する調査報告書」（1940 年、奉天：滬友同窓会奉天支部）

「蔣本東華録の異本に就て」『收書月報』第 50 號（1940）

「滿洲族の衰滅に就ての考察」『大同學院論叢』第 3 輯（1940）

「沈陽圖書館藏明實録に就いて」『滿州學報』第 6 册（1941）

「滿州國經營の體驗」『東亞聯盟』1942 年第 2 期

「思想善導問題に就いて」『東亞聯盟』1944 年第 10 期

新刊紹介

内藤湖南『讀史叢録』、『支那學』第 5 卷第 4 號（昭和 4 年 12 月）

がことがある。その結果、令孫の松浦晉也氏と接觸できた。しかし終戰時、松浦の夫人と令息のお二人が辛うじて内地に辿り着いたことを聞き知るのみで、詳しいことは分からないというお話であった。

[63] ここには氣が付いたものはすべて擧げておいたが、遺漏も多いと思われる。大方の示教を請いたい。

M. Granet, *La civilisation chinoise.* Paris, 1929、同上

中央研究院歷史語言研究所『安陽發掘報告』（第一期）、同上

矢野仁一『支那近世外交史』、『支那學』第 6 卷第 1 號（昭和 7 年 1 月）

圖書寮編纂『圖書寮漢籍善本書目』、同上

謝國禎『清開國史料考』、『支那學』第 6 卷第 2 號（昭和 7 年 4 月）

梅原末治『歐米に於ける支那古鏡』『漢三國六朝紀年鏡集録』、同上

瀧川龜太郎『史記會注考證』、『支那學』第 6 卷第 3 號（昭和 7 年 7 月）

〔隋〕蕭吉『影印三寶院本 五行大義』、同上

石田幹之助『歐人の支那研究』、同上

岡崎文夫『魏晉南北朝通史』、『支那學』第 6 卷第 4 號（昭和 7 年 12 月）

郭沫若『金文叢攷』、同上

Owen Lattimore, *Manchuria: Cradle of Conflict*、『支那學』第 7 卷第 1 號（昭和 8 年 5 月）

講演

「上海租界小史」（東洋史談話會、1932 年 2 月 14 日、樂友會館）未發表

「四庫全書について」（天理圖書館開館二周年記念講演會講演、1932 年 10 月 18 日）未發表

「兩漢時代の廟制」（開所記念講演會、1933 年 11 月 11 日、東方文化學院京都研究所講演室）『東方學報』第 4 册（1933 年 12 月）に要旨掲載